

もらい乳と山羊肉スープ

佐々木 晋

私たちの娘はインドネシアの小さな村で生まれ育った。当時ジャカルタで働いていた私は、生まれてくる子どもには自然あふれる田舎で遊びまわってほしかったので、ジャカルタ郊外の村へと引越した。そこには素朴でやさしい心を持った人々が暮らしていた。

妻が臨月にさしかかる頃、近所に住むヤテイさんが出産を迎えた。村の女性たちがそうするよりに自宅での出産だった。ただ、ヤテイさんは助産師を呼ぶお金もなかったもので、すべてを独りで済ませようとした。二人目の子どもなので出産の経験はある。無事に子を産んで、臍の緒の処置をするところまでは良かった。ところが、そのあと赤ん坊を抱いたまま意識を失ってしまった。外で遊んでいた三歳の子がたまたま家に帰ってきてきて母親の異変に気がついた。その子は私の家に助けを求めに来た。すぐに病院の緊急医療に運び、ヤテイさんと赤ちゃんはどうにか無事だった。

ヤテイさんは次の日、入院代が払えないからと退院してしまった。私が負担すると言っても、頑として「これ以上迷惑を掛けられない」の一点張りだった。その三週間後、今度は私の妻が出産した。設備の整った病院で妻は娘を産んだ。数日後に退院すると、ヤテイさんが毎日我が家に来てきては、妻と子どもの世話を焼こうとする。自分も乳児を抱えているというのに、私たちの娘の面倒を見ようとする。受けた恩に報いるため、だという。妻は母乳の出が悪く、ヤテイさんは妻の乳房をマッサージしつつ、自分の乳房から私たちの娘に乳を飲ませた。娘はそうやって数日間もらい乳をして育った。

ヤテイさんのように貧しいけれども助け合って生きていこうとする村人たちに囲まれて娘はすくすくと育っていった。自然あふれる村にはいくらでも遊び場があった。娘は村の子どもたちと毎日遊びまわり、そのうちに木登り名人として知られるようになった。

娘が三歳の誕生日を迎えようとしていた時だ。村の人たちに感謝の気持ちを伝えたくて、山羊の肉を配ることにした。娘がここまで大きくなれたのは村人たちのおかげでもある。ヤテイさんも含めた近所の人に、娘とよく遊んでくれる村の子どもたちに、少しでも肉を食べてもらおうと考えたのだ。

村長に相談すると、村の衆が集まって神に祈りを捧げながら山羊の命を頂く儀式を娘の誕生日当日に行うことに決まった。

近くの農家から山羊を買うと、儀式のまだ三日前だというのに家に届けられた。山羊のこの世での最後の三日間は、私たちが心を込めて世話をすべきだというのだ。神に恵みを感じつつ、人間のために命を犠牲にする山羊に思いを巡らし、その世話を一生懸命しろという。

どうすればいいのか分からず、裏庭に縄でつないでおくと、山羊は庭の芝生を食べ散らかしては、ぼろぼろと排泄ばかりしている。

それでも娘は大喜びした。大型の動物が手の届くところにいるのだ。さっそく庭に生えているキャッサバの葉をちぎっては食べさせた。たくさん食べるんだよ、食べて大きくなるんだよ、な

んて声をかけながら。そんな姿を目にすると、山羊を肉にして食べるとはとても伝えられなかった。そして、三日間のうちに娘の情が山羊に移ってしまった。

いざ、儀式の当日（娘の誕生日）、村長が山羊の縄を引いて連れて行くこうすると、娘は号泣しながら、村長を「山羊ドロボー」と罵って決死の抵抗を試みた。

村長が娘にやさしく諭し聞かせる。この山羊がいかにか村人たちの身体を強くするか、どれほど素晴らしいことを人間にするのか。それは神の思し召しであり、それゆえ山羊は天国へと昇るのだ、と。

もちろん、そんな話では娘を説得できない。娘は小さな腕で懸命に山羊にしがみついて守ろうとした。「連れて行ったらダメええ」と叫び続けた。村長に頭突きを食らわせた。仕方なく最後は力づくで娘を山羊から引き離すよりなかった。

散々な誕生日になってしまった。それでも、ひとしきり大声で泣き喚いた後、娘は喉を潤らしたガラガラ声でこう言うのだった。

「山羊さんは天国へ行って、神様と一緒に暮らすんだよね。人間のためにいいことをしたって、神様にたくさんほめられるよね」

子どもは幼い間にその無邪気さで一生分の親孝行をするという。周りのものを全身で愛そうとする幼子の姿に、親はただ心打たれ、愛おしさを募らせる。

ところで、ご近所に配った山羊の肉は、ある家庭が自慢の山羊肉スープを料理して、おすそ分けとして我が家にも振る舞われた。決して恵まれた家ではないのに、そうやって少しでも他人と分かち合おうとする。そんな村人のやさしさを浴びて娘は幸せな子ども時代を送ったのだった。